

## 新きのこ「バイリング」の新品種・新形態・機能性食品の開発

### 1 中核機関・研究総括者

(社)長野県農村工業研究所 西澤 賢一

### 2 研究期間

2006～2008 年度 (3 年間)

### 3 研究目的

新きのこ「バイリング」の現行品種は、栽培期間が長く、またきのこ形態が不均一であることなどから収益性が低く普及するに至っていない。また培養技術、適正な培地の開発や栽培環境についての検討が不十分なために、栽培技術が確立されていない。これらの課題を迅速に解決するため、効率的な育種方法によって、栽培期間が短く収益性の高い品種を作出するとともに、栽培技術を確立し、さらに機能性を生かした加工食品の開発をおこなう。

### 4 研究内容及び実施体制

- ① バイリングの新品種開発 ((社) 長野県農村工業研究所、長野県野菜花き試験場)  
プロトプラスト技術を利用して迅速に新品種を開発する。
- ② バイリング栽培方法の開発 (長野県野菜花き試験場)  
バイリング栽培に有効な培地資材を検索し、その資材を使った低コストで栽培できる技術を開発する。
- ③ 新形態バイリングの開発 (長野県野菜花き試験場)  
通常のビン栽培では作ることができない大型のバイリングや遊休施設を利用した自然栽培により業務向けのきのこを栽培するシステムを開発する
- ④ バイリングの機能性を生かした健康食加工食品の開発 ((社) 長野県農村工業研究所)  
機能性を生かし、幅広い年代層に支持される簡便型加工食品や新技術利用によるニュータイプ食品の開発を行う。

### 5 目標とする成果

労働生産性の高い高品質品種の作出、安定栽培方法の確立、業務用に向けた新形態きのこの栽培方法の確立、健康食加工食品の開発を行うことにより、バイリングの生産安定、消費定着及び需要拡大を図る。

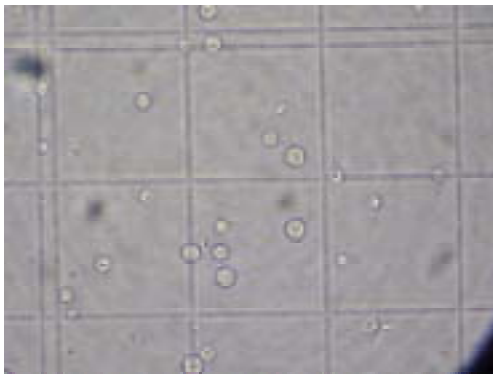
# 新きのこ「バイリング」の新品種・ 新形態・機能性食品の開発

バイリングの品種としての課題

形が様々で均一性が乏しい  
栽培に要する期間が長い



プロトプラス技術



プロトプラス技術の利用により・・・

- ・育種目標にあった品種を確実に作ることができる
- ・スピーディーで効率的に作ることができる

育種により「均一」「短期間」で栽培できる品種の作出

生食

新形態

機能性健康食品

大型化(エリンギ)

消費拡大

